
夏恋な花火 2 0 0 9

紅崎 夏妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏恋な花火2009

【Nコード】

N0667I

【作者名】

紅崎 夏妃

【あらすじ】

誰だって、いけないとわかってする不倫なんてない。ほんの小さなことで始まり、最後は、傷つきながら、別れるのが、互いのため。歳の離れた、一葉に哲平は、恋をした。夫もいれば、子供もいる。それでも、思いを貫こうとする哲平だったが、一葉が、苦しみはじめる……。これ以上、一緒には、いけない。別れるのが、前提の愛なんてあるのか……。

・・・で、愛。（前書き）

決して、不倫を正当化するわけではなく、こんなせつない事は、あ
っては、いけないと。繰り返しては、いけない恋。

・・・で、愛。

事故みたいなのだって、友達は、言ってた。突然、恋に落ちる事は。。。でもね、よくある事なんかじゃ、ないと思うよ。あつては、イケナイ事なんだと、思う。過失かな。二人とも、わかっていた結末だと思う。

「花火大会すごかったね。」

「うん。最高だった。でも、一緒に、いられるだけで、満足だな」「あたしも」

哲平 27 歳。一葉 37 歳の山形の夏だった。

哲平と一葉が、初めて、あつたのは、片田舎町の小さな、会社だった。一葉は、37 歳にしては、幼く、とても、子供 2 人がいるとは思えないほど生活の匂いのない女性だった。

「なにか、困った事があつたら、なんでも聞いて下さいね」

哲平は、今日から、配属になったパートの一葉にいった。

「まあ、まあ、綺麗な。」

哲平は、自分とは、年上の女性を、そう評価した。あとから、一葉に、伝えた事だが、年は、少し、上だけだと、思ったらしい。それを、一葉に伝えると、一葉は、嬉しそうに、こころ笑った。

「一葉が、若い時に自分に、逢ったら、相手にしてくれないでしょう？」

哲平は、よく一葉にからんだものだ。

一葉の、職場の主任が、哲平という事になるが、女性の多い職場で、まんざら、哲平は、女性ファンも多く、彼の年に、みあった、可愛い彼女もいた。よく、昼食の時など、哲平と彼女の交際について、話題になったが、家庭もある一葉には、何の関心もなく、長期出張に行ってる夫の帰りや、子供達のことだけで、頭がいっぱいだった。そんな、一葉と哲平の距離が縮まったのは、哲平と彼女が、

喧嘩別れをしてからだった。若い哲平は、どこかの会社の次男坊らしく、行動のはしはしに、それらが、みえるが、今回の別れの原因も、哲平の我儘だった。

「束縛されるのがいや」

になったらしい。お互い、わかいカップルらしく、逢えば、互いを求めあう間だったので、彼女にしてみれば、結婚を考えるのは、当たり前前の事で、それが、まだ、遊び足りない哲平には、重荷になったらしい。一葉と、共に仕事をするようになって、哲平は、よく、彼女の事を相談していた。

「まだ、紫藤くんは、結婚にむかないよ」

別れを相談された、一葉は、笑って答えた。とは言っても、同じ職場の、哲平の元彼女の健康状態も気になる、二人が別れてから、元彼女の薫は、ずーっと休んでいる。なんでも、体調を崩して、入院しているらしい。ちょっと、哲平の非情さと薫のふがいなさに、苦笑いしながら、一葉は、薫に連絡してみようと思い、哲平に薫の連絡先を聞いてみた。

「えっ、ちよと、まって」

職場の人達に、自分達の交際がばれていないと思っていた哲平は、一瞬とまどった表情を浮かべたものの、一葉には、好意をいだいていたので、すぐ、薫のメアドを赤外線送信した。

「あっ、念のため、紫藤君のも」

一葉は、何気なく、哲平とメアドも、交換した。早速、社交辞令でメールすると、その日の夕方、哲平から、夕食の支度をしている、一葉に、メールが届いた。

「紫藤です。これからよろしくお願いいたします」

「あら・・・律儀」

一葉は、笑った。ごく普通のメールだったが、これから、全てが始まってしまった。

繋がる・・・。

「何時まで、起きてるの？」

哲平からのメールは、頻繁なものに、なっていた。

・・・いつたい、いつ、送信する暇があるのだろうか？・・・

と、一葉が不思議に思うほど、哲平からの、メールは、早く、返信もすぐきた。一葉が、帰宅し、食事の支度をしていても、それは、続き、夜は、寝付く瞬間まで、メールは、続いた。

・・・いい加減、無視して寝よう・・・

と思っても、哲平を思うと、邪険にも、できない。一葉も、弟をかまうような気持ちで、哲平にメールし、その内容は、次第に、エスカレートしていった。おもえば、最初は、一葉の、本のイタズラ心だったかも、しれない。・・・が、哲平は、常に真剣で、こんな事を聞いてきた事も、あった。

「ねえ、あの内容は、ご主人とベットにいる時にうつたの？」

涙目になっていた。

「そんな事ないよ」

一葉は、はつとし、否定した。ここん所、夫婦の間は、冷えており、もう、別室で過ごすだけの間である。

「仲、悪いから。」

そう、告げると、哲平の顔は、明るくなった。

「もしかしたら・・・」

一葉は、感じていた。哲平が、もう、自分に、愛情を感じている事を・・・そして、自分も。

「ねえ。」

一葉は、メールした。

「いま、哲平の、自宅、近くまできている」

と。何と、答えるのか。すぐ、メールの返事は、きた。

「じゃ、俺も、すぐ行くから」

街中の、レンタル屋である。

「本当に？」

一葉は、

「そこで、待つてる。」

と、伝えた。勿論、最初は、冗談であったが、すぐ、行くと言われ
たら、行かない訳にいかない。一葉は、コートを、1枚はおると、
あわてて、夜の街に、出て行った。

「まさかね。」

いる訳がない。でも、いたら、どうする？一葉の、心が、震えた。
「もしかしたら、あたし・・・」

こんなに、ときどきするのは、何年ぶりだろう。いるはずがない。
そう思いながら、30分待った。どこかで、期待してる。一葉は、
待ちきれなく、なっていた。彼に逢いたい。

「どこにいるの？」

一葉は、彼にメールしてしまった。彼からの、メールは、すぐ、戻
ってきた。

「まさか、本当にくるとは、思わなかった。待つてて」

哲平は、車を、走らせ、息咳切った顔で、一葉の前にあらわれた。
あわてて、出てきた割には、これから逢う一葉に、気をつかったの
だろう。ジャケットをはおり、うわさ通りの、お坊ちゃまの格好で
ある。

「お茶でも、飲む？でも、こんな処、誰かにみられたら、困るだろ
う。車にのって」

哲平は、一葉を、自分の車に、乗るよううながした。

「どこに行く」

車は、夜の街へと走り出した。彼は、運転しながら、一葉の家族の
心配をした。やはり、一葉には、家族があるのである。

「こんな所、誰かに、見られたら、どうするの？」

それらを、心配しながら、哲平は、一葉に

「おれ、一葉さんなら、いいと思います。」

意味深の言葉である。何度も、

「好みの女性は、一葉さんみたいな人」

何度も、繰り返し、哲平は、いった。

「うん。でもね。哲平君では、親子になっちゃうじゃない？」

笑顔で、一葉が、応えるた。

「ええ！」

と、哲平の顔は、曇った。後から、聞くと、親子と言われたのは、かなりシヨックだったらしが。

ほんの、1時間のドライブを、終え、遅くなるからと、哲平は、元の場所に、一葉を送り届け、二人は、別れた。帰宅後、一葉にメールが、届いた。

「一緒に買い物に行こう！」

というメールだった。

「いつ?にする？」

「合せる！」

「じゃあ！忘年会のある。その日」

平日で、たまたま2人は、休み。2人は、新幹線で、隣街に向かうというわけだ。その日の、夕方は、2人の職場の、忘年会があるため、どうしても、時間の都合上、新幹線という訳になったのである。この日。2人の関係は、お互いが、気をつけていたのに、かわらず、かわってしまうことになる。

その日、朝は、近くのショッピングセンターで待ち合わせをし、哲平のマンションの駐車場に、一葉の車を停め、新幹線ホームにむかった。2人は、恋人きどりである、新幹線にのっている間、哲平は、広いシートに腰をおろしているに、一葉の、体に、よりかかっていた。

「狭いのかな」

一葉は、その時、あまり気にとめなかったが、今思うと、哲平も、その時、一葉と同じ気持ちだったにちがいない。寄り添う哲平の気持ち、嬉しかった。自分の気持ちも、哲平とおなじである。買い物をし、哲平にみたてて、もらいながら、洋服を買った。

「こんなの、どう？」

一葉が、哲平にえらんだのは、ストライプのマフラー。哲平によく似合う。

「いいよ。悪いから」

哲平は、嬉しそうに、遠慮した。

「これ、プレゼント」

一葉は、哲平に、今日の記念とさしだした。照れくさそうに、受け取りながら

「じゃ、俺は、ケーキ買うから」

「甘い。嬉しい。でも、何処で、食べるの？」

「うん。俺のマンション。」

「へえ・・・」

駅ビルで、一葉、お勤めのケーキを購入し、帰路。哲平のマンションにむかい、買ってきたケーキを食べた。洋ナシのタルトであった。

「タルト好き？」

「うん」

「でも、食べきれないね？」

二人は、笑った。

「疲れた？」

「俺。マッサージできるんだ」

「へえ。いやらしい」

「まさか」

リンパマッサージの資格を持っているという哲平は、一葉の脚のマッサージをはじめた。ケーキを食べる為という事と、これから、出席する忘年会に着替える為、哲平のマンションにいたわけだが、一

葉には、哲平が、何を考えているのか、わからなかった。男1人住まいのマンションにノコノコついてきて。軽い女とみられないか、それとも、普段から、女性とは、そおいう付き合いをしている男なのか。哲平は、一葉の、脚のマッサージをしている。確かに、資格をとっているだけあって、マッサージは、上手だ。真剣な顔で、一葉の脚を、マッサージしている。眼差しが、何故か愛おしく感じてしまった。思わず、一葉は、哲平の右手をつかんでいた。その手を、自分の右胸に重ねていた。

「えっ？」

哲平は、驚いたが、拒まなかった。メールで、さびしくて、仕方の無い夜、哲平に抱きしめてくれと、頼んだことがあった。哲平は、ふざけながら、

「いろんなコースがあるんですけど・・・」

つて、答えつつたっけ。ごく、自然に、一葉は、哲平の手をとっていた。すると、哲平の、左手が、一葉の体を包んでいた。思わず、一葉は、哲平の顔を見上げた。そこに、哲平の眼差しがあった。本当に思わず・・・だった。

・・・ごめんなさい。そんなつもりじゃ・・・。

一葉の唇が、哲平を求めていた。哲平は、拒否しなかった。その後、2人は、どうしていたか、覚えていない。ただ、いつまでも、哲平が、一葉を抱きしめていた。それだけを、一葉は、覚えていた。もう、引き返す事は、出来ない。一葉は、自分の気持ちに嘘は、つけない事を確信した。このまま、いつたら、2人は、大変な事になる。でも、一葉には、哲平と一緒にいる事が全てに思えた。そして、哲平は、これから、彼女と一緒にいる事であらゆる事で苦しむ事になるうとは、思わなかった。あの時、マンションに入らなければ。後で、傷付かずに、すんだらうに・・・。思いのままに、一葉は、哲平を求め、哲平は、一葉を求めたんだと思う。20代のまだ、若い哲平は、一葉を、ひたすら、追いかけはじめていた。そして、一葉も、渡っては、いけない橋を渡ってしまう。それは、年明けての、

1月。哲平のマンションで、晩御飯を食べる事が、2人の習慣になりつつ、あった時である。ごく普通に、哲平は、一葉を誘い、一葉も、彼を受け入れてしまった。

「この次の休みは、何してるの？」

カレンダーを、横目でみながら、哲平は、一葉の予定を聞くようになっていた。

休みがあわなければ、2人で、休みをあわせ、時間をつくり、哲平のマンションで過ごす日が、増えていった。多い時では、週に2回、逢う事が、増えていった。

「とくに、ないよ」

「じゃあ。逢おう！」

「うん」

一葉は、笑った。自分を、思ってくれている。嬉しい。本気で、自分を求めてくれるのが、嬉しいが、答えられない現実が、一葉を、待っている。だから、哲平の、思いが、強ければ強いほど、辛く感じる時があった。

「帰らないで」

帰宅の準備をしはじめると、哲平は、邪魔をしはじめた。

泣き出しそうな顔をして、帰らせまいとする。どんなに、一緒にいても、一葉の持つ現実が、哲平を苦しめた。衣服を、身につけるとさえ、邪魔をする。

「もう、帰るの？」

「だって、哲平。ここは、私の家でないもの」

「！」

「・・・あっ・・・」

と、いう顔をしたまま、哲平は、目を伏せた。

「ごめん」

一葉も、まずい事をいつてしまったと、後の言葉を探ったままだ。見送る時、いつも、哲平は、寂しそうな顔で、一葉を見送った。

「気をつけて」

見送る彼の顔が、寂しそうだった。

1度だけ、一葉を自宅まで、送ったときが、あった。突然。

「一葉の旦那がうらやましい」

ポツンと哲平は、つぶやいた。

「哲平」

・・・ああ、でもね。・・・

一番、苦しいのは、一葉だ。哲平とすごした後、自分の家族と逢う。・・・いつたい、どんな顔で逢えば、いいんだろう。いつまで、続くんだろう。・・・

哲平を、本気で愛していながら、この苦しい報われない恋を終わらせ、心穏やかに、家族の中にありたいと願う気持ちがわきおこる事もある。若かったら、哲平の元に行けるのに。でも・・・自分に、子供がいる。突きつけられる現実。一葉の我儘。エゴと呼ばずとして、何と言うか・・・彼を繋ぎとめておいて、いいのか。・・・

・・・それでも、哲平を愛している。・・・

この、矛盾。一葉は、自宅に着くと、すぐ到着メールを送った。

・・・只今、到着。・・・

・・・お帰り・・・

すぐ、彼からは、返信が来る。こない日は、なかった。

彼を心配させないために、メールを打つ。いつまで、続くか、わからない恋にとらわれて。

バレンタインが、間近にせまっていた。

「ケーキつくる」

「誰が？」

「哲平が。」

「何で、俺が？」

「教えるから。」

当然、哲平の部屋ですごした。

「もっと、一緒にいたい」

「旅行に行こう」

「行きたい」

2人は、旅行の計画に行こうという話で、盛りあがっていた。

「行き先は？何処行きたい？」

「那須」

「わかった」

行き先は、一葉の、行きたがっていた那須になった。温泉をまわり、美術館めぐり、後は、一葉の好きな買い物だ。

「じゃあ。ラーメンも食べる」

哲平の意見で、名物のラーメンも食べる事になった。念願の、1日中一緒にいられるのである。2人のテンションは、上がり、ますます離れられなく、なっていた。

事故。

2人で、泊まるのは、これで2回目だ。前は、新年会の帰り。泊まらず、帰ろうとしていた、一葉を、哲平は、何度も、説得し、自分のマンションに泊まる事にした。

「俺が、寝てるうちに、かえるんでしょ？」

哲平は、自分を置いて、一葉が、朝、早く、帰ってしまうと思っていた。一晩中、一葉を抱きかかえて、眠りについた。今回は、一葉が、途中でいなくなる不安はない。それでも、哲平は、一葉を、抱きかかえ眠りにつくのだった。無邪気に、寝息をたてて……。

一葉は、幸せだった。勿論、いつまで、続くのか、わからない。彼には、未来がある。でも、自分には……。同じ時間を共有できるだけで、幸せだった。彼の寝顔は、無邪気で、一葉の、愛した彼そのものだった。いつまでも、そばにいたい。一葉の、せつない思いだった。

山間の小さな旅館に泊まった。部屋も、それなり、哲平が、以前行った先の、お土産を、二人であけて、部屋で、食事をした。昼間は、哲平が、調べておいたグルメ巡りをし、アウトレット巡りをし、買い物に行った。一緒にいる時間を貪るように、過ごした。哲平と一緒にいると、一葉が、心配する程、誰かから、メールが、頻繁にくるとか、連絡が、来るとか、そんな事は、なかった。ひたすら、一葉との時間を、大切に過ごしていた。旅行は、すぐ終わった。2人で、いられる時間も、また、作らなければならない。だいたい、哲平の休みに、一葉が、あわせる形になった。一葉が、6月に長期出張に行くと思った、哲平は、すぐ携帯をかけてきて、向こうでおちあいたいと、提案した。一葉は、苦笑いしながら、約束した。1日長く、横浜にいて、哲平と買い物しよう。

「また、一緒にいられる」

一葉は、嬉しかった。那須から、帰ってきてからも、哲平のテンシ

ヨンは、下がらなかった。

「今度は、どこに行く？」

哲平は、一葉を、本当に愛していたんだと思う。何度も、メールに、一葉への思いが、届けられていた。それに、こたえたい。一葉は、思い詰め始めていた。うまく、いつてないとはいえ、夫は、離婚してくれらるだろうか……。子供たちは、どうするのか。何より、この若い、哲平は、私を愛しぬくことが、できるのだろうか。10歳違いのである、彼の親が許す訳がない。何より、彼の子供を生むことは、できない。もう、人生をやりなおせる程、一葉は、若くない事を、知っていた。それでも、彼を愛している。一葉の、心は、乱れていた。

旅行から、帰ってきて、季節は、春になっていた。毎日、時間をみつけては、逢う日が、続いていた。そんな時、一葉は、つとめる会社の車を運転中、事故をおこしてしまった。しかも、哲平のめの前で……。

「哲平！」

一葉は、絶叫した。

ブレーキが間にあわない！加速した車は、後方の壁に激突した。瞬間、哲平と眼があった。自分は、おいすぎる眼をしたと思う。

車は、やがて、停車し、駆けつけた哲平は、呆然と立ちすくんだ。

「ちょっと、紫藤君。何してるの！」

同僚の声で、主任でもある哲平は、我に帰り、責任者としての行動に、うつった。

「とにかく、病院へ。」

「哲平」

自力でたっていられない一葉を同僚に残し、同乗者達を、車にのせかえて、診療所に向かって行った。

「ごめんなさい」

一葉は、その場に座り込んだ。

「痛い所は、ない？」

「一葉は、本当に大丈夫？」

哲平は、何度も、一葉にメールをおくってきた。事故の処理で、自分も忙しいのに、一葉を心配しているのだ。

一応、若いとはいえ、哲平は、事故責任者である。一葉の、事故の対応に、追われていた。

その日の夕方、哲平のマンションに行く予定だった。やめようかと、気のりしなかった。でも、このまま、一人で帰宅しても、気が滅入るだけだった。

「哲平に逢いたい」

予定通り哲平のマンションに行く事にした。何より、哲平に慰めてほしい。一葉は、事故後の精神面を心配する同僚をよそに、哲平のマンションに向かった。

離れられない・・・。

季節は、春を迎えていた。どこも、桜のピンク一色。一葉は、携帯で、桜の花を、哲平に写メした。

「お花見いきたい」

「俺も、そう思っていた。一緒に行こう」

2人で、休みのあう日を探し、桜の花も散りかけた頃、隣の市の古城のある町にでかけていった。

その日、いつになく、哲平は、不機嫌だった。

「俺は、晴れ男なの」

自慢していたが、その日は、朝から、小雨。

「誰かさんの行いが、悪いから」

マンションに行った時から、不機嫌で、

「一日中、自由なら、もっと、遠くに行けるのに・・・。」

不機嫌そうに哲平は、つぶやき、歩く時も、

「誰かに、みられると、大変だから」

と、離れて、歩いた。事故の事で、不機嫌なのか。哲平の後ろ姿は、一葉を、拒否しているようにも、見えた。それでも、しばらくすると、機嫌は、少し、直り、古城の周りも、すぐ見終わった。

「時間があれば、那須の方にも、いい所があったんだけど」

一葉が、ゆつくりできないのを、また、不満そうにこぼした。きくと、哲平も、一葉と自分のおかれてる現実に傷ついているに違いない。これは、不倫だ・・・。どんな、理由があるにしろ。真面目で、将来を夢みている哲平を苦しめている。それでも、哲平も一葉も、お互い、あう事を辞めれない。あってしまうと、また、次の約束をしてしまう。そのうち、取り返しのない事になってしまう。逢うと、最初は、不機嫌だった哲平も、帰りには、一葉との別れを惜しむ。

「ねえ、誕生日何か予定ある？」

2人で、買い物にいった帰りに哲平は聞いた。もう少しで、一葉の誕生日がくる、一葉自身には、誕生日は、あまり嬉しいものでは、なかったが、記念日と同じで、哲平には、特別な日なんだろう。予定が、ない訳がない。それでも、一葉は、何とかして、哲平と居たい。

「一緒に、お祝いしよう」

哲平は、一葉に、一緒にすごす約束をとりつけた。

「うん」

「また、年齢。離れちゃうけど」

そして、一緒に、買い物してきたアクセサリーのパーツで、これから、何を作るか、はなしあった。

「そおいえば、これ」

哲平が取り出したのは、会社近くの、神社のお守りだ。

「えっ……」

一葉は、驚いた。朝に弱い哲平が、早起きして、近くの神社で、交通安全のお守りを買ってきてくれたのだ。

「嬉しい。買ってくるの、大変だったでしょ？」

いつも、職場では、そっけない態度でいるが、自分の事を心配し、朝が苦手なのに、こうして、お守りを買ってきてくれた。

「ありがとう」

照れくさそうに、哲平は、笑った。不機嫌だったり、哲平の気持ちかわからない時がある。でも、こうして、哲平は、自分を気にかけてくれている。それだけで、十分なんじゃないか……。これ以上、哲平に何を望む？一葉は、何も彼にしてあげれないのだ。

「誕生日のその日は、大丈夫」

何があっても、空ける。そして、哲平と一緒に誕生日を祝いたい。一葉は、その日、彼にあう事にした。

「お誕生日おめでとう！また、年が離れちゃったね。これからも、よろしく」

誕生日の朝、一葉にメールが届いた。

「じゃ、またあとで」

仕事のはいつてた、哲平は、一葉と夕方に近くのショッピングセンターで待ち合わせをし、メールを終えた。夕方には、逢える。一葉は、前日に哲平から、行きたい店を聞かれていた。哲平は、予約をいれておくという。人目を気にしている哲平にしては、珍しく、街中のフランス料理の店だ。中に、だれか会社の人がいなくても限らない。

「オーダーどうする？」

照れくさそうに、前髪を引っ張りながら、哲平は、聞いた。正面に座ると、いつも、哲平は、恥ずかしそうに、前髪をひっぱる。2人で、那須にいった時も、そうだった。食事の時、前に座ると、視線をはずす様に、前髪をいじる。哲平の前髪は、癖がつよい。少し、後退しつつ、あるのを、哲平は、気にしていたおり、一葉には、からかうネタになっていた。

2人で頼んだコース料理を食べ、店を後にした。

「一葉は、何か甘いものたべる？」

哲平は、一葉の好きな甘いものを買ってくるのを提案した。

「どこが、あいているかな？」

時間は、8時をまわっていた。近くのスーパーで、甘いものを買い、その足で、軽いドライブにでた。

「一葉の、いつている教室見に行きたい！」

哲平は、一葉のカルチャースクールの場所を見たがった。そのまま、哲平のよく行く公園で、ブランコにのった。

もっと、哲平と一緒にいたい。時間は、どんどん過ぎていく。一葉は、自分の置かれている家庭環境も、子供の事も、忘れたかった。何を、おいても、哲平といたい。でも、この日、哲平は、一葉を、早く帰したがつた。3日後には、また、2人で、軽井沢方面に旅行に行くから。

「俺、東照宮にいきたい」

哲平からの提案だった。あとは、一葉の好きなアウトレットめぐり、予定は、目一杯入っている。その後は、フラワーパークで、一葉の好きな藤の花も見る予定。ゴールデンウィークすぎてから、ちょっと様子の変わった事もあり、旅行で、また、ゆっくり話しが出来ると思い、一葉は、楽しみにしていた。3月に、あったとき、哲平は、友達に2人の関係を、打ち明け、責められたと、言っていた。

「相手の、家族に訴えられるぞ」

と、言われたらしい。

「本気で、説教された」

らしい。

そのまま、悩んだらしいが、一葉と、それでも、一緒にいると、彼なりに、選択したようだが……。最近、すぐ帰ってくるメールも途絶えがちになっていた。だから、誕生日のお祝いメールが来たときや、旅行の前日に

「日光方面は、17度くらいになるから、気をつけて」

一葉の、体調を気遣うメールが来たときは、安心した。朝は、いつものとおり、電車で行き、駅で待ち合わせ、東照宮に向かい、群馬の吹き割れの滝を、めざし、近くの小さな旅館で1泊し、次の日は、軽井沢にむかって、アウトレットめぐりをし、フラワーパークへ。

いつになく、たくさん、写真をとった。この、旅行から、帰ったら、別れを切り出すつもりで居たと、後から、哲平は、言っていた。でも、そんな事を、感じさせないほど、哲平は、一葉を慕い、一葉も、哲平を慕っていた。

「やつばさー。きついよな、37歳は」

笑顔で哲平は、皮肉をいった。

「あたしだって、27歳は、きついよ」

一葉も、そうかえした。

それでも、2人ではいると、お互いひきつけあってしまう。生きてる世界がちがう。年が違ふ。一緒には、決してなれない。わかっているが、なかなか、わかれられない。このまま、いくと、お互いに

よくない。特に、一葉の子供たちは、どう感じるのか。それに、哲平は、これから、まだまだたくさんの恋愛をするだろう。一葉が、最後の女になるわけがない。そう、一葉も、感じていた。

「まだ、かえれない」

旅行後、真っ直ぐ、送ろうとする哲平を一葉は、はなさなかった。

「でも、俺は、送るから」

そう言う哲平をひきとめ、一葉は、彼をマンションにうながした。

「一緒におちて。」

「うん」

理由も、わからず、哲平は、うなずいた。

一葉は、このまま、彼と、一緒にいたいと思っていた。何もわからず、うなづく哲平。でも、後のメールで、

「堕ちるといふのは、悪い方向に行く事では、ないよね？」

と、念をおした。一葉が、思うより真剣に、先の事を考えているのだろう。哲平は、一葉の事を、考えていたんだと思う。だから、ひく事もできる。決して、自分の事だけを考えているんじゃない。何も考えず、哲平の愛情をむさっぱているのは、一葉なのでは、ないだろうか……。それは、一葉は、常に、彼を求めていると思う。そして、彼も一葉を求めている。お互いに、互いを必要としていたと思う。旅行から、帰ってきてからは、いつもの哲平にもっとっていた。メールも、すぐ、もっどってきていたし、互いに、車ですれ違っただけでも、すぐ、メールが届き、当初の2人に戻っていたように、一葉は、感じていた。そう、あの日がくるまでは……。

一葉からの別れ

哲平と同じ職場に、朝月という20代の女性が、入社してきたのは、丁度、一葉と哲平が、互いの境界を越えてしまう去年の12月から이었다と思う。朝月菜は、23歳でありながら、バツ1で、1歳の子持ちであった。この、彼女が、哲平に熱をあげはじめた。帰り道は、勿論、哲平の帰宅にあわせて、駐車場で待ち伏せをする。仕事の確認メールをいれるからと、メルアドをきく、2人で、仕事をする機会も増えて、一葉は、心の休まる暇もなくなってきた。自分は、知られてはいけない存在なのだ・・・。

一葉も、それは、判っているが、若い菜が、自分のものと、いいたげに、哲平のそばにいる事が耐えがたく、それは、哲平と一葉の喧嘩するネタになりつつあった。そして、とうとう、菜と哲平が、仲がいいという話をしていた一葉は、職場で、主任でもある哲平に、注意を受けた。

「自分の、発言に注意してください」

「別に、そういうつもりで言ったんじゃないやありません」

「仕事として、注意したんです」

哲平は、イラついているようだった。職場での、一葉についての注意は、これだけでは、なかった。なにかと、一葉の行動が眼につくのか・・・。とにかく、哲平の一葉にたいする態度は、つめたく何かと一葉を注意したがつた。余りにも、多いので、たまりかけた一葉は、哲平に電話した。

「・・・だから、あなたがた、おばさん達は」

一葉は、耳をうたがつた。

「今、何て、言ったの？」

電話ではなすとき、哲平は、特に感情的になる。

「あんたがた、おばさん達」

一葉は、言葉を失った。感情的になっているとは、いえ本心である

う。哲平は、普段から、こんな事を思っていたのだろうか。一葉は、思った

決心しなければならない。いい加減目を覚まそう。彼は、10も年下なのだ。いい気になって、一緒にいる場合じゃない。若さだけしかない女と比べられて、自分が、惨めでは、ないか。一葉は、電話をきった。

・・・もう、決めなければ、ならない。これ以上、好きになれば、傷つく。哲平を解放しよう・・・

そして、メールをうちはじめた。

・・・もう、一緒には、いられない。あなたの言葉に心が凍りついてしまつて。どうか、ほかの人と一緒になつて。・・・

と、メールを打った。

・・・終わった。・・・

一葉は、思った。所詮、不倫でしかない。どんな理由があろうと、こうなる事は、わかつていた。きつちり逢つて話したかったが、哲平がこわかった。哲平から、すぐ、返信は、きた。

・・・おばさんなんて、思つてなかったよ。ただ、友達が、真剣に俺の事を心配して、説教されました。子供を大切に上げて・・・メールは、それで、終わっていた。やはり、哲平も、考えていたのだ。最近、哲平の態度が、遠く感じていたのは、嘘でなかった。哲平は、明日から、友達と旅行に行く為、仮眠中だったようだが、一葉からの別れのメールに気づきすぐ、返信したのだ。内容は、一葉を引き止める内容では、なかった。別れを覚悟していたのだ。以前、哲平と話した事がある。

「哲平に彼女が出来たら、教えてね。あたしすぐはなれるから」

哲平は、悲しそうに、うつむいていた。

「そんな・・・」

彼女は、できてないけど・・・これ以上、自分の気持ちだが、狂つてしまふ。そう、別れをきめたのは、哲平ではなく、一葉本人だった。

「どうせ、俺の事なんか、捨てるんでしょう」

哲平の口癖だった。

「俺の事なんか、忘れるんでしょう」

違う。一葉は、思った。これ以上、一緒にいたら、2人は、ダメになる。哲平も、メールでそういつて、いるでは、ないか。

・・・これ以上、一緒にいたら、本当にダメになる・・・

お互いを真剣に考えたなら、そうなるのでは、ないか。自分で、別れを切り出しておきながら、一葉は、おかしくなっていた。哲平が、恋しくて仕方が無い。どうしたら、いいかわからない。メールの来ない携帯を、何度も、開き、来てない画面を、みつめていた。

・・・哲平にあいたい・・・

もう、おかしくなる。

旅行から、帰った哲平は、一葉を見て、呆然とした。人目を気にせず、一葉に近づいていった。

「一葉さん・・・その髪は・・・」

失恋したら、髪を切るとあるが、まさか、少女じゃあるまいし・・・。

「変ですか？」

一葉の、背中まであった髪は、あごのラインで切りそろえられていた。

一葉から、言い出した別れでは、ないか。それなのに、一葉は、寂しいとメールをおくり、哲平に逢いたいとも告げた。せつかく別れる事ができたはずなのに、一葉は、精神のバランスを崩しつつあった。

「あの・・・」

哲平は、

・・・いわなきゃ・・・

と、思った。不思議な事もあるものである。一葉と哲平が別れを決めたその頃、哲平は、人事異動で別の場所に、移動する事になった

のである。哲平は、ほかの人には、言えた。・ ・ ・ただ一葉にだけは、言えなかった。他の人に、挨拶した。その一番最後に、

「一葉さんも、お元気で」

ペコリと哲平は、頭を下げた。

・ ・ ・これでいい。顔を見なければ、一葉も、楽だろう。・ ・

哲平も、一葉との別れを決めかねていた。だから、時折、メールしてしまふ。陰から、一葉を、応援したい。素直に、一葉に、自分の気持ちを、伝え、一葉とは、逢わないように、お互い、傷つかないように、そーっと、接することにした。それでも、哲平も、一葉に、未練があるのか、いろいろ一葉の、職場の心配をし、メールをつづけた。

「もう、逢う事は、ないよね」

一葉は、はっきりしない自分達の関係に、電話で聞いた。

「まって、俺は、優柔不断だから・ ・ ・」

迷う哲平を、一葉は、けしかけた。

「はっきり、きめて！」

この関係を、きってほしい。

「もう！あわない！じゃあね！」

無理やり言わせて、電話は、切れた。いつも、一葉が、強引なんだと思う。本当は、哲平と一緒にいてと言ってほしい。でも、それは・ ・ ・。

一人で、結論をだし、また、苦しむ。その繰り返しである。

「もう、私のものは、全てすてて」

用意された台本を読むように、一葉は、彼につげた。もう、戻らない。すべて、覚悟した。

・ ・ ・メールもしない。彼を忘れよう・ ・ ・。

彼は、昔、好きだった人に良く似ていた。そう、彼の代わりとして、愛したのだと、そう思う事で終わりにする事にした。

揺れる哲平

愛しい人と別れたら、人は、どう毎日を過ごすのだろう。逃げる事ができればいい。子供のいる一葉には、それは、できない。いやでも、現実が待っている。毎日、部署移動といっても、隣の建物にいる哲平と顔を、あわせないように、1日をおくり、夜がくるのを待つ。とにかく、時間が経つのを、ひたすら、まった。時間が、哲平を忘れさせてくれる。どんな慰めの言葉より、時間こそ、解決するいい薬だった。何より、つらいのは、今まで、頻繁に届いていた、メールだった。何をしてても、メールは、届き、返信もすぐきた。たまりかねた一葉が、メールしても、返信は、なかった。哲平の事を、忘れかけた1ヶ月ほどして……忘れていた携帯がなった。哲平からだった。

「あの……」

哲平は、おずおずと話しかけた。

「お弁当箱なんだけど……。こうしてみたら、かなりたまっている」

ああ、一葉は、よく、1人暮らしの哲平に、お弁当を作り、届けていたのだ。

「捨てても、よかったのに」

「でも、わるいから……。あえない？」

一瞬迷った。

……自分から、別れを言い出したくせに、あいたつがた一葉を、あんなに哲平は、拒否したのに、今頃あいたいなんで……。

「自分勝手なのは、わかってる。でも……」

空のお弁当箱なんて、捨ててもらっても、かまわない。でも、何か言い足りない事もあるのか……。

「ちよっと、メールの事で聞きたい事があるんだ」

一葉は、逢いたい気持ちもあって、哲平とあう約束をした。哲平の

マンションでは、危険だから、車でいつもの、ショッピングセンターに待ち合わせをし、最近、新しくした車でむかった。

「本屋で待っているから」

ショッピングセンターに着くと、哲平は、いつもと同じ様子で、車に乗り込んだ。

「公園にむかって」

哲平は、行き先を指示すると、助手席で、寛ぎはじめた。

・・・お弁当箱なんて、どうでも良かったのに・・・。

せっかく、静かな生活に戻りつつあったのに、この青年は、一葉の気持ちはどうして、かきみだすのか？

「あのさ、話っているには、メールの事なんだけど・・・」

哲平が、気にしたのは、メールの中にあった、一葉の前の彼の事だった。哲平を気にしたキツカケが、前彼に、似ていたからというのを、確認したかったのだ。

「ああ、あれね」

そんなことを気にするとは、思っていなかったのだ、一葉は、面食らった。

「ま、そんな事は、いいんだけど・・・。」

どうして、今更、あいになんて出てくるんだろう。話なんて、電話ですむことだし、お弁当箱だって、すてれば済む事なのに。そのくらい、冷たい思いきつた事ができる性格のはず。

「ね、お願いがあるの」

一葉だって、ずーっと逢いたかったのだ。

「ハグしてほしい」

と、哲平にいった。

「えっ、」

哲平は、あわてて、お茶を口にした。

「今、急にいわれても」

でも、少しだけなら……。と、哲平は、一葉を抱き寄せた。ハグするだけのはず。一葉は、哲平の顔をみた。哲平も拒否は、しなかった。一ヶ月前、あんなに、あいたったのに。一葉の意思は、関係なく、哲平は、その子供ぼっさで、一葉を求める。最初、一葉が、求めたハグだったが、いつしか哲平は、激しく、一葉の唇を求めた。

……。これで、最後だ……。

一葉は、そう思い、哲平を抱きしめた。

「どうして1人じゃないんだ……」

哲平は、一葉を抱きしめながら、つぶやいていた。

……。もう、これで終わった……。・・・

帰宅すると、いままで、一葉は、いつも、哲平に、到着メールを送っていた。だが、もう、終わった恋なのだから、メールを送る必要もない。そう、思っていると、メールが届いた。

「もう、これが最後のキスなの？」

哲平からだった。一葉との別れは、覚悟した訳では、なかったのか？一葉は、迷った。迷ったが、哲平への気持ちが勝ってしまった。

「それは、哲平次第」

「ずるい」

「逢いたい……」

「前より、逢えなくなるけど、それでもいい？」
と、哲平。

「それでもいい。そばにいて」

一葉は、また、戻ってしまった。このとき、戻らなければ、綺麗に別れる事ができたのに……。

2人は、また、もどってしまい、また、つぎに逢う約束をしてしまったのであった。

別れたくない……。

「ラベンダーの咲き具合、聞いてく」

哲平からの、メールは、一緒に、ハーブ園に行こうという内容だった。だいたい時間で、1時間ぐらいドライブして、近くのお菓子屋さんで、一葉の好きなケーキを買って、湖近くのレストランで、食事をする計画。いつも、でかける時、2人で計画をするのだが、2人である時以外、哲平が何をしているのか、一葉には、わからなかった。前の彼女が、とにかく焼きもちやきだとは、聞いていたが、聞かない限り、自分からは、教えてくれなかった。

時間は、いつもより、遅めにでて、ハーブ園に向かうが、哲平は、以前にもまして、人目を気にしていた。

……冷静に考え、別れを決めた……

前回の、哲平の言葉である。子供にも、良くないといい、一葉や自分の将来、周りに迷惑をかけるというのだ。それなら、何故、また、逢ってしまうのか。

車を運転中は、サングラスをかけ、ハーブ園では、一葉から、少し離れて歩いた。レストランでは、知っている人がいないか、確認してから、入店した。肝心の一葉は、どうとしたもので、見つかった時でも、普通にしているつもりでいた。その割には、哲平は、一葉に、次の予定を聞き、たまたま一葉の不都合な日でも、強引だった。

「その日は、どうしても、だめなの？」

哲平は、聞いた。実は、一葉の娘の参観日なのだ。隠しても、仕方がないし、ここで、哲平を優先する訳には、いかない。哲平は、離れていく人なのだ。

「ごめん。娘の参観日なの」

「そうか……。いいんだ。俺は、子供の次で」

・・・ごめん。・・・

一葉は、自分が、1人でない事を謝った。こんな恋の相手に、してしまった彼に謝った。

・・・彼に何でも、出来る事は、してあげたいのに・・・。

この年齢では、彼と一緒に歩いていく事は、やはり出来ない。一葉の、中では、いつも、自分の年齢や立場を苦しむ気持ちが渦巻いていた。若い女の子を見れば、

・・・哲平の彼女は、こんな若い子が合うのに・・・

とか、いろいろ思ってしまう。若さへの嫉妬めいた気持ちが、一葉をいらつかせ、こんな思いをさせる哲平を恨めしく感じるのだった。そんな一葉の気持ちが、ついに爆発した。キツカケは、あの栞だった。

「どうして、そんな事を知っているの？」

一葉は、携帯でからんだ。哲平に勤務状態を、一葉より、栞が知っており同僚達に話しているのだ。一葉は、自分が、焼きもちをやく資格は、十分にあると思っていた。

「どうして、起こるの？朝月とは、たまにメールするだけでしょ？」

「だって、嫌なの。止めて、ほしいの」

一葉は、自分の願いを聞き入れてほしかった。・・・が

「考えておく」

言葉をのんだ。彼は、そんなに、一葉の気持ちを考えてないのかもしない。

「俺が、何をしようと自由じゃないの！」

哲平は、激昂していった。そして

「だって、俺達、永遠じゃないよね！」

「・・・。」

一葉は、絶句した。確かに、永遠じゃない。彼は、永遠であれば、そんな事は、しないのだろうか。いつも、哲平の、真っ直ぐで、隠し切れない感情は、一葉を傷つける。

「あなたは、不安でしかない・・・」

哲平の、素直な気持ちだった。哲平は、真剣に一葉を考えての結論だったのだろうか。応えられないまま、一葉は、携帯をきった。そして、哲平から、メールが届いた。

「やっぱり、一緒には、いられない。もう、終わりにしよう。今後、逢うのも、連絡をとるのも、終わりにしよう」

きつと、哲平は、廊下であうのを、さけるだろうし、自分も顔を見れなくなる。

「何も、返すのは、ないよね？」

哲平から、この間のお弁当箱は、ないよねとの確認だった。

「最後に、一葉の事は、わすれない」

別れをメールだけでは、すませたくない。一葉は、携帯をかけた。そして、キッチンと、別れたいと、哲平に話した。

「わかった。時間は、一葉にまかせる」

一葉は、別れる為に、哲平に食事を作りに行く事にした。メニューは、哲平の好きなエビちり、バラとケーキを買い、哲平といつものとおりに、ふざけながら、食事の用意をした。

「俺は、一葉との、時間は、ムダだったと思ってないよ」

・・・本当に最後なんだ・・・

一葉は、少し涙ぐんだ。でも、これで、もう苦しむ事はない。

「逢えないのも、つらったけど、逢ってるのも、つらかった」

一葉は、哲平の手をとった。これで、最後だから、帰りは、1人で帰ろう。見送って、ほしくはない。最後のシャワーを浴び、いつものとおり、哲平の隣に、横になった。

「ねえ、一葉を、感じていい？嫌ならいいけど」

哲平は、一葉を抱き寄せた。これで、終わりなんだ。一葉は、身をまかせた。

「一葉・・・」

うつぶせに、なっただまま哲平は、聞いた。

「8月14日の山形の花火大会、一葉は、調べてくれたんだよね？」
哲平は、前から、一葉と、一緒に行く予定だった花火大会をきいた。
本当だったら、泊まりで行く予定だったが、お盆だった事もあり、
1泊は、無理という事であきらめていた花火大会である。その代わ
りに、また軽井沢に行こうという話になっていた。

「でも、もう行けないね。だって、別れるんだから」
一葉は、応えた。

「誰といくの？」

時々、哲平は、意地悪をいう。一葉が、浴衣を買った時も、一葉の
地元のお祭りに一緒に行こうというのだ。

「花火大会。向こうで待ち合わせしようか？」

今、別れ話の話の最中では、ないのか？哲平は、急に、

「延長して。まだ、一緒にいたいんだ。別れない。」

いいだした。延長とは、別れを延長という事なのか。

「だって、浴衣をかったんでしょ？ビキニだって、買ったんだよ
ね？」

哲平と海に行くつもりで、ビキニは、買っていた。海沿いの宿に、
海水浴をして、花火大会に行く。そのつもりでいたから。

「一緒にいたい」

「・・・わかった」

・・・哲平と、一緒にいたい。少しでも・・・

もう少し、一緒に居たかった。2人の口癖である。もう少しだけ・
。。その分、別れも辛くなるのに。一葉も哲平も、もう少しだけ、
一緒にいる事を選んでしまった。別れは、綺麗な内に、終わってお
けば良かったのに。傷は、どんどん深くなる・・・。

この花火を忘れない。

8月14日山形の花火大会。

一葉と哲平は、本屋の駐車場で待ち合わせをした。浴衣を持参し、どこかで着替えてから向かう予定。

朝、駐車場に現れた哲平は、やっぱり、不機嫌だった。別な所に車を停めた、一葉を、面倒臭そうに誘導し、助手席に一葉を乗せると、車を走らせた。

「俺、朝飯は、ヨーグルトしか、食べてないの」

ようやく、県外を出ると、哲平は、話し出した。

「だと、思つて。」

一葉は、哲平の好きなパンを差し出した。

「おお！気がきく！」

いつもの哲平だった。哲平の好きなメロンパン。食いしん坊で、よく食べる。試食は、よくし、一葉は、それを、恥ずかしがった。そういや、ヨーグルトの蓋や、アイスの蓋も、よく舐めていたっけ。

哲平は、ご機嫌で、ドラマの話や自分の理想とする女性の話をした。勿論、仕事の話は、しなかった。

「俺は、やっぱ、ああいう子がいいな」

ドラマの女性をさしている。それに、自分は、入ってないのだ。時々、哲平は、意地悪を言う。

途中、ワイナリーによって、一葉は、哲平に、ワインをプレゼントした。

「いいの？」

哲平は、あまりお酒は、飲まないが、このワインは、好きなようだ。「運転してくれた、お礼」

一葉は、それを言つと、ちょっとトイレとばかり、席を外した。トイレに行つてから、哲平は、何処かと、見渡してみると、休憩所のベンチに腰掛けていた。声をかけようかと後ろから近ずくと、哲平

は、メールを見ている処だった。

「哲平？」

声は、かけられなかった。メールを見ている哲平の顔が、切ない表情だったのだ。遠目に、何らか、ハートマークも見える。女性からである事は、間違いなかった。たぶん、それは、今から、思うと、元彼女からの、メールであつただろう・・・。

「あなたの痕跡が強くて・・・」

車を走らせた哲平が、つぶやいた。

「痕跡って？」

一葉が、聞くと・・・。

「いや・・・」

哲平は、黙り込んだ。山形市内に着くと、2人は、買い物しながら、時間をつぶし、食事をした。駄菓子屋にも行つて、ふざけながら時間をつぶした。

「もしかしたら、バスの時間に間に合わないかも！」

2人とも、買い物に夢中で、花火のバスの時間に間に合わなくなるのに、気がつかなかった。あわてて、一葉は、ショッピングセンターの乳児室で浴衣に着替え、哲平は、駐車場に着替えた。

「へー。似合うじゃん」

哲平は、一葉の浴衣姿を見て、満足そうだった。一葉も、嬉しかった。ちょっと、暑い日だったが、哲平に喜んでもらうと、我慢して着たかいが、あった。

「・・・でね。俺達、今、向かっているんだけど」

哲平は、友達に場所確認の携帯をかけていた。もう、時間は、せまっている。バス乗り場まで、急いだが、最終バスには、間に合わず、コンビニで聞いた公園に、車を、とめて、1時間ばかり歩く事になった。

「えー！歩くのー？」

一葉は、歩きずらそうに、哲平に文句をいった。

「まあ、まあ」

なだめすかし、哲平は、虫よけスプレーをした。この夏、哲平は、運悪く、虫に刺されて、悪化し、腫れがなかなか、ひかなかった。その為、念入りに虫除けするのだ。

「でも、歩くの、暗くて、怖いよ」

花火大会の会場で見たいという哲平に従って、会場まで、歩くのだが、道中は、暗闇で何も見えなかった。気味が悪いので、一葉は、哲平にくっついた。1時間歩くのは、浴衣の一葉には、大変な事である。それでも、哲平とじゃれあいながら、歩くとそんなに、苦にならなかった。8月だというのに、山形の夜風は、冷たかった。2人は、シートをひくと、並んで、夜空に向かった。打ち上げられる花火が、綺麗だった。

・・・来年、哲平は、別の人と花火を見るんだろう。自分もおそろく・・・。

2度とない時間を2人で共有している。この花火を、見ただけでも、幸せと感じよう。一葉は、思った。5月の最初の別れがなかったら、2人は、大曲の花火大会に行つて、いただろう。2人で、どこにでも、行き、もう、引き返せないところまで行つていたかもしれない。一葉の、家庭は崩壊し、職場は、おわれ、将来のある哲平は、傷つけられるであろう。だから、別れなければならない。周りに、気づかれないうちに・・・。2度とない時間は、花火のようだった。2度と同じ形には、ならない。哲平の隣にいられるのも、あと、僅かだろう。そうおもうと、切ない花火。山形の花火。この浴衣も哲平に見せたくて、思い切つて、買った物だ。あと、いつ着るかは、わからない。花火は、2時間程で、終わり。2人は、帰らなくては、ならなくなった。明日、哲平も一葉も仕事である。

「このまま、朝まで居ちゃおうか？」

「うん。そうする」

ふざけて、哲平は言つた。

「また、旅行行きたい。」

「軽井沢！」

「えーつ。この間、行つたじゃん」

「行きたいの」

また、旅行の話をした。もう少し、ゆつくり、したい。が、そういう訳にも、いくまい。2人は、大人しく、帰る事にした。高速をつかつて、帰宅は、深夜になった。

「16日は、空いてる？」

哲平は、帰宅すると、すぐ、聞いた。海に泳ぎに行こうというのだ。「俺さ、すぐ仕事終えて来るから」

午前中で、仕事を終え、海に泳ぎに行き、その後、本宮の花火大会に行こうというのだ。彼と一緒に、居ると本当に、忙しい。

「いいよ。お昼は、何か考える」

「うん。期待してる」

哲平にまた、逢える。一葉は、嬉しかった。帰宅してからも、哲平から、メールが届いてた。

・・・一緒に居られるだけで、大満足だな・・・

一葉も同じ気持ちだった。この、メールの言葉があったから、哲平の愛を信じ、しばらく、傷つく事になるのだが・・・。

海に行く日、一葉は、待ち合わせ時間より、少し早めに着いてしまったが、思いの他、はやつかったのは、哲平だった。仕事を丁度に残え、かなりのスピードで来たのだろう。想像がつく。

「おまたせ」

哲平は、無邪気な笑顔で、乗り込んできた。荷物の入れ替えが、面倒くさいという事で、一葉の車で、海に向かう事になった。2度目の一葉の運転である。

「えー！緊張するよ」

運転する一葉を横目に、哲平は、いい気なものである。助手席で寛ぎ、運転する一葉に、イタズラしていた。山形の夜は、一葉が、哲平にイタズラをし、高速で危ないんだからとか、哲平に、叱られた

ばかりである。

1時間ばかりで、海につき、2人は、着替えた。哲平は、買ったばかりのボディボードを持ち、海に飛び込んでいった。まぶしい思いで、一葉は、見送った。

「一葉は、すごいよな」

「何が？」

ビキニの一葉の目線を合せないように、哲平は、つぶやいた。

「年齢を感じさせない」

「ちよつと！」

一葉は、哲平につかみかかった。

・・・おばさんなんて、思った事ないよ・・・

以前に哲平は、一葉に言った。2人でいると、年齢なんて、気にした事なかった。2人で、じゃれあい、哲平は、男として、一葉の面倒をみた。

「ご飯にしよう」

哲平は、一葉の作ってきたサンドイッチをほうばり、このまま、向かう本宮の花火大会の計画をした。山道を行きたがったが、運転をする一葉は、嫌がった。

「だって、こわいんだもん」

「へー。一葉は、こわがりなんだ」

哲平は、嬉しそうだった。海で、一泳ぎした後、急いで、本宮に向かい、2人は、前々日の、山形とは、比べ物にならないくらい、素朴な花火大会を見た。縁石に2人で腰掛、どこからみても、ごくありふれた、カップルだった。この2日間、一葉にとって、贅沢な日だった。これから、しばらく逢えない事があっても、この2日間の思い出だけで、生きていける。そんな気さえしていた。

哲平が、好き。我がままで、いつも熱くて、真っ直ぐで。そして、何より、自分を思っていてくれる。哲平のおかげで、自分は、いろんな事をがんばれた。目標もでき、いろんな可能性をしまった。何より、女として、目覚める事が出来た。……。そして、哲平は、

一葉に年をとる事の辛さを教え、忘れていたジェラシーをもたらし、多く傷つけた。この年齢で、傷つく事は、耐えられなかった。

愛しているから、別れる。

「俺、感染したかもしれない」

哲平から、突然のメールに一葉は、驚いた。会社で、C型肝炎者の注射針を、謝って、指にさしてしまったらしい。いわゆる針刺し事故である。

「すぐ、水で洗い流したし、俺、悪運強いから・・・。」

C型肝炎は、血液かんせんである。感染の確率が多いのは、針刺し事故である。性行為で、感染する事もあるし、口内に傷がある場合、キスで感染する事だって、考えられる。

・・・これは、あたしは、ためされているの？・・・

一葉は、自分の行いが、悪いが為、哲平がいろんな目に合うと、思っていた。この所、哲平が、健康を害しているのは、自分のせいでは、ないか。この前、腰を痛めた時、哲平は、

「入院したら、一葉に付き添ってほしい」

とせがんでいた。今回の、C型肝炎感染は、どう考えれば、いいのか。その週末、約束どうり、哲平のマンションに一葉は、いた。

「俺、我慢するから」

哲平は、一葉の、膝の上にいた。自分は、感染したとしても、自分が選んだ事だから、仕方がないとして、自分の子供達は、どうなんだろう。20年後、一葉の、この行動で、万が一、感染し、苦しむ事になったら・・・。それでも、この目の前にいる彼を感染が怖いからと、放り出す事が、出来るのだろうか・・・。

一葉は、迷った。感染が怖いからと、彼を突き放す事は、出来ない。両手で、彼の頬を抱え、そのまま、唇を重ねて、しまった。感染してない。それを、信じよう。もし、心配な時は、自分も、検査するしかない。一葉は、一時の感情に押し流されてしまった。ここまで、一葉が、決心したのに、やはり、哲平は、まだ、若く、経験がなかった。一葉の、思いは、彼に通じでなかったのか、やはり・・・。

不倫の重みに耐えかねたのか……。彼の、周りで、何事か、変化が起きてた。それは、おそらく、あのメールの、元彼女であろうか。一葉を、凍りつかせるメールが、その1週間後、届いた。それは、哲平が、何日か、旅行で、休んだ後だった。今までになかったのだが、連絡が、とれなくなつた日が続いた。そして、出勤してきて、すぐの、メールだった。

……。もう、一緒にいられない。好きな子ができた。その子と、一緒にいたいから、これから、気持ちを伝えようと思う。突然でごめん……

予測できた事だった。以前、哲平に

「好きな子が出来たから、わかれようって、言うんでしょ！」

「俺をそんな風に見てたわけ？」

言い争つた事が、あつたのだ。案の定、予測どおりでは、ないか。

……。わかつたよ。その子に幸せにしてもらつて……

一葉は、覚悟していた。こんな時が、いつか、くると。でも、つい、この間、逢い。ずーっと、一緒にいるだけで、満足だと言つたのは、哲平では、ないか。ほんの、1週間前の事なのに。一葉は、仕事中心だったのに、ショックで立つてられなかった。

……。もう、愛されてないのだ。今まで、何度も、一緒に居たいと言つていたのは、誰だったのだ？どうして、1人じゃないんだ？と言つたのは、誰だったのだ？哲平でなつたのか？……

「嘘つき」

一葉が、全てを、犠牲にしなかったのが、せめてもの救いだった。やはり、彼は、まだ若く、経験がない。他に一緒に居たい人があるなんて、感染しているのを知って、関係してしまった一葉に、ひどくないのか……。だが、予測できた事だった。

それでも、一言、聞きたい事がある。一葉は、夜、彼に携帯をかけた。

「……」

が、切られてしまった。

・・・どうして、1週間やそこらで、好きな人が出来たつていえるの？あの時、どうして、関係をもてたの？・・・

それだけが、聞いたかった。が、携帯はきられた。もう1度かけてみた。

「・・・」

が、でない。

・・・もう、わかった。あなたの望みどおり2度連絡はしない・・・最後のメールを送り、一葉は、メアドをかえた。

・・・もう、彼とは、連絡しない。・・・

傷つきたくは、なかった。哲平から、もらったお守りとペアのチョーカーを箱に入れた。そして、会社の彼のロッカーにそっと、押し込んだ。

・・・終わつたのだ・・・

何度も、別れを繰り返して、それでも一緒にいたいと思っていたのに、やはり、哲平は、若く、他の女に恋をした。解りきつた事でないか・・・。もう、自分は、彩はなく、若い女と比べられるのは、耐えられない。自分達は、10歳も違うのである。

・・・ここで、別れてしまえ・・・。

哲平の事は、全て、忘れるのだ。あの、朝月の事とだって、前兆にすぎなかったのだ。

「哲平は、チャラ男だから、あげるわ」

一葉は、帰り際、悔し紛れに、朝月に言い放った。朝月だって、好きあらばと、哲平を狙っていたのである、自分が降りたいま、もう関係ない。そう、一葉だけは、そう思っていたのだが、ある日、突然、携帯がなった。哲平からだった。

「でない」

一葉は、無視した。哲平とは、終わりにしたのだ。もう、繰り返したくない。傷つけられるのは、もう嫌なのだ。彼は、感情的に彼女を追い詰める。携帯は、1時間置きになった。メアドを変えたから、

哲平から、メールは届かない。電源を切っていても、携帯は、哲平からの、着信を知らせていた。・・・でるしかない。一葉が、哲平からの携帯にでると、恐ろしく、興奮した哲平の声だった。

「あなた、俺達の間関係を、周りの人にはなしただろうか？」

「何のこと？」

「朝月にいったらどう？」

また、朝月とは、メールで繋がっているのである。朝月に哲平をあげると言ったことで、朝月が、2人の関係を疑ったらしい。

「俺は、ようやく、この職場になれたの。お願いだから、土下座でもなんでも、するから、誰にもいわないで」

「あたしかまわない」

一葉は、イジワルな気持ちになった。

「お前、だってこの職場に居られなくなるぞ」

この期におよんで、哲平は、自分の身の保全をいうのか。

「冗談よ。あたしだって、子供がいるんだから」

「朝月と俺が付き合っていると、思っているのか？だとしたら、それで、嫌味を言ったのか？今、ようやく、分かったよ。何て、女なんだ」

「どうして、そう相手の傷つく事がいえるの？」

「誰が、そうさせたの！」

真っ直ぐで、冷たい哲平の声。もう、一葉を愛している哲平の声では、なかった。

「なんなら、俺の好きな人みますか？」

これ以上、ひどい言葉は、ないと思う。自分の気持ちに正直な分、平気で人を傷つける。どうして、一葉が、哲平の好きになった女に会わなければならないのだ・・・。別れたくないなんて、一言も言っていないのに。

「だいたい、いつも勝手に判断して・・・。思い込みで・・・。で、結局、未練で電話してきて・・・。終わったから、今更、いいんだけど。」

哲平は、感情的に続けようとした。

「もういいよ。もう・・・」

つらくなつた一葉が言うと

「また！いつも、自分勝手に・・・」

哲平の怒りは、とまらなかつた。一葉が、メアドを勝手に替えた事を怒っているのか、とまらなかつた。

「やっぱり、無理だつたんだよ」

哲平は、つぶやいた。やっぱりでは、ない。哲平が、本気で、望めば、自分は……。でも、もう。駄目だ。

「哲平聞いて・・・」

一葉は、彼との関係が、辛くなっていた。

・・・もう辛い。哲平のこの真つ直ぐさが好きだった。でも、自分は、彼といると傷つき、なんとボロボロになり事か・・・。

激しい恋愛なんて、したくない。静かに愛されたいだけだった。哲平は、振り回し、奪うだけ、奪ってさつてしまう恋。

・・・もう、疲れた。彼と、本当に終わりにしよう。・・・

「あのね。聞いてほしいの」

一葉は、冷静に話しかけた。哲平は、誤解だったことが分かり、少し、落ち着いていた。

「結婚記念日が近いの」

別れる時期には、丁度いいのよ。と、説明するように、一葉は、結婚記念日が、近いと、説明した。こんな不安定なまま、結婚記念日を、迎えられないと、日々、悩んでいたのだ。それだけ、哲平の事を、愛し、悩んでいた。だが、

「お祝いしなよ」

哲平は、怒っている感じだった。

「そのつもり。でね。やりなおそうと思っている」

一葉も、ひらき直った。

「そうしてほしい」

哲平の声は静かになっていた。そんな事、言ってほしくないのだが、

・・・

「やっぱり、無理だったんだよ」

携帯の向こうで、哲平が、寂しく笑うのが聞こえた。鼻で、軽く笑い。そして

「さよなら」

力強い短い声だった。きばつりと。

「じゃあね」

一葉も、携帯をきった。涙がとまらなかった。終わったのだ。せめて、顔を見て、終わりにしたかった。でも、逢ってしまったら、また、始まってしまう。もう、終わりにしたい。彼を好きになれば、なるほど、自分も相手も傷つく。どうして、自分は、哲平と友達でいられなかったんだろう。すれ違えば、良かったのに、どうして彼を不倫という目に合せてしまったんだろう・・・。せめてもの、救いは、彼に好きな人が出来た事じゃないか。自分は、2度と、彼に逢っては、いけない。こんなに、自分勝手な哲平を、いまでも、愛してる。一葉は、メールした。

・・・消えようとして、ごめんなさい。うらまれても、当然。自分を大切にしてくれる人を思わなかった事を哲平に教えられた。本当に、ごめんなさい・・・

替えていたメアドを哲平に告げた。もう、やりとりは、ないだろう。・・・うらんでなんかいいよ。今まで、ありがとう・・・
哲平からの最後のメールとなった。

いまでも、一葉は、哲平を愛してる。でも、それは、もう、夢の中での事と思う事にしている。哲平は、どんな事があっても、一葉を忘れないと言ったが、新しい恋に埋もれてしまっているだろう。最後に一葉は、哲平にメールした。

・・・哲平は、まだ若い。これからたくさんの恋をするでしょう。だから、哲平とは、哲平に好きな人ができるまでにしようって思ってた。子供が大きくなるまで、普通の家庭でいられるようがんばる。哲平の処には、戻らない。哲平もそうだと思っただ。哲平といわれ

て、幸せだった。……。

山形でみたあの花火は、忘れない。あの2日間があるから、しばらくがんばる。自然と哲平の姿を探してしまうかもしれないけど、この恋……。もう、終わらせる。不倫なんて、お互いしてはいけない。それでも、いまでも……。哲平。でも、この恋は……。

それから……。哲平へ。

哲平。結局。あなたは、元彼女の薫と、復縁していたのね。あたしには、「好きな人が出来た」と、言ったのは、嘘だったのね。そして、「その子と、ずーっと、一緒にいたい」と、言ったのは、真実。でも、どうして、あたしに、本当の事を言ってくれなかったの。そうすれば、一緒にいり間に、他に好きな人を、作っただ……。って、思わず二、すんだのに。でも、この後の、告白には、驚いたよ。

「どんな形であれ、俺に幸せになってほしいと言った思いだけは、かえないでほしい」

そう……。哲平。我儘だよ。

何があつたの？と、聞くあたしに、あなたは、簡単に、

「子供ができました」

と、返信してきたね。きっと、あの、8月の、ワイナリーで、メルを見つめていた頃の、赤ちゃんだよ。つらかったよ。あたしと、一緒にいたのに、彼女を、妊娠させていたなんて……。そして、「結婚する」

それは、あたしには、衝撃的だよ。哲平。もう、忘れよう。あたしが、どんなに、がんばっても、哲平を幸せにする事は出来ない。あなたの嘘も我儘も許そう。それ以上に、あたしは、嘘をついたのだから……。

「もう、忘れない」

あたしの言葉に、あなたは
「わすれてほしい」

そう、言ったね。

「今後一切、連絡もせず。お互いに触れない。お互いの幸せを、影から、応援しよう」

それが、最後の言葉になったね。何が、真実だったか……。それは、二人にしか、わからない。きっと、その時の二人の愛し合う気持ち、真実だったと思う。ただ、上手く、育てられなかっただけ。きっと、今でも、あたしは、哲平を、愛してる。だから、彼と、元彼女の結婚を、暖かく、見守ろうと思う。そして……。生まれてくる子供のために。哲平と逢えて、良かった。これ以上、あなたの傍にいる事は、よそう……。

……。心。強くなれ……。

一葉。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667i/>

夏恋な花火2009

2010年10月9日07時24分発行